

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

ヒンズー寺院暴動と民族問題

古賀万由里 (開智国際大学国際教養学部講師)

2018 年 11 月 26 日の夜明け前、スランゴール州のバンジャヤにあるヒンズー寺院で信者に暴漢が襲い掛かり、複数が負傷し、車が放火された。それを消火しに駆けつけた消防士が暴行を受け、数日後に死亡した。

この寺院は 1891 年にシーフィールド・エステート(農園)で働くインド系移民がマリアンマン女神を祀るために建てたもので、通称「シーフィールド寺院」と呼ばれている。1987 年にコングロマリット(複合企業)のサイムダービーがエステートから土地を買収し、その後土地は MCT 不動産に売られる。都市開発が進み、高速道路沿いにある同寺院は移転を強いられた。前々政権の国務大臣は土地を寺院に与えるように命じたが、MCT 不動産は同意しなかった。

2007 年、土地は MCT 傘下で近くの複合施設「One City (ワン・シティー)」の開発を担うワン・シティー・デベロップメントの手に渡った。14 年には寺院管理委員会も移転に合意したが、地域の信者たちは反対。寺院は宗教的教育に熱心な主司祭のもとで儀礼や祭礼が定期的に行われており、毎週金曜日には 300 人ほどの信者が集まり、年に一度の火渡の祭りには 6,000 人が訪れていた。17 年 12 月には信者たちが移転に対して抗議活動を行い、2 万人ほどの署名を集めた。

だが 18 年 9 月には裁判所から立ち退きの令状が発せられ、新しい管理委員たちは寺院でハンガーストライキを実施。その後、ワン・シティー・デベロップメントが 11 月 22 日までに寺院を破壊すると通告し、寺院は緊迫した状態になった。そして事件当日の 26 日、同社に雇われたといわれている暴漢が乱入する事態が生じた。

ヒンズー寺院が周辺開発のために破壊されたり移転させられたりすることは今までも数多くあったが、シーフィールド寺院のケースは、ヒンズー寺院問題にとどまらなかった。政界では民族問題、宗教問題ではないとする見解が出されたが、この事件は人々に 01 年にヒンズー教徒とマレー系ムスリム(イスラム教徒)との間で勃発した暴動、カンボン・メダン事件を彷彿させた。また 12 月には、人種差別撤廃条約を批准しようとしたマハティール首相に対する抗議デモも生じた。

確かに、シーフィールド寺院事件は「開発」対「宗教施設」といった構図で捉えられるが、マレー系ムスリムの居住空間とモスクが守られているのに対し、ヒンズー教徒のそれらはないがしろにされていることは否めない。憲法では宗教実践の自由がうたわれているが、ムスリムの居住地区の近くにヒンズー寺院があると苦情が出る。また民族対立をなくそうという考えがある一方で、少数民族または多数民族の票を獲得するのに、民族対立は政党に利用されている。

今回の暴動では、マレー系の消防士が殉死したことで事件はさらに大きな議論を呼んだ。暴動の責任をめぐっては、寺院問題をうまく収められなかった、元ヒンズー人権行使団(Hindraf)指導者のインド系の大臣を非難する声も上がっている。農園があった土地に建設されたエステート寺院が多く、開発が進んでいるスランゴール州では同様の問題をかかえる寺院が数多く存在するものの、ペナン州ではヒンズー宗教基金委員会(Hindu Religious Endowments Board)が寺院を管理しており、このような問題は穏便に解決されている。現在、ペナン州以外にもヒンズー宗教基金委員会を設立することが計画されている。

筆者がシーフィールド寺院の主司祭に、今回の事件が国家レベルの問題にまで発展したことに驚いたことを告げると「それは女神の力だ(That's HER power)」という返答があった。寺院はヒンズー教徒にとって信仰の場であるとともに利権であり、多数勢力に抵抗する場であるといえる。



祖先祭祀の日にシーフィールド寺院に集う人々＝2018年8月、スランゴール州(筆者撮影)

< 筆者紹介 >

慶應義塾大学社会学研究科で博士(社会学)を取得。専門は文化人類学で、南インドとマレーシアでヒンズー文化を中心に研究を行っている。主な著作は『南インドの芸能的儀礼をめぐる民族誌 生成する神話と儀礼』。